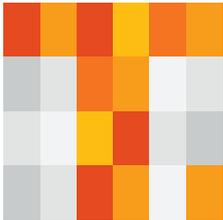


どなたでもご受診いただける地域の病院



東京警察病院 NEWS

TMPH Tokyo Metropolitan Police Hospital
2020 Spring Vol.30

CONTENTS

- 院長新年度の挨拶
新型コロナウイルス対策特集
- 医師コラム「マスクと手洗いの『標準予防策』とは
- 5階東病棟の紹介
- 患者さんからのメッセージ(提案箱)より
- 新規導入MRIのご紹介
- 電話による処方せん発行について



院長新年度のご挨拶



院長 長谷川 俊二

桜の花も美しく咲きそろい、お花見に気持ちが華やか絶好な季節を迎えましたが、今年は新型コロナウイルス感染の拡大により世の中の様子が例年とは異なっています。

毎日報道される中国、アメリカ、ヨーロッパの感染者数、死亡者数や過酷な医療現場、都市の封鎖などの状況を見ると感染症の恐ろし

さと医療体制の整備の必要性が身に染みて感じられます。まだまだ終息の兆しが見えてきませんので、皆様には感染予防に十分注意を払い、密閉空間、密集場所、密接場面を避けた生活を心がけていただきたいと思います。

新年度を迎え、当院では引き続き地域の基幹病院として「医療の質の向上と患者さまの満足を目指し日夜努力する」という理念のもとに、最新かつ高度な医療を提供するとともに患者さんの権利と意志を尊重し、満足いただける医療の実践に努めてまいります。

本年は、新規の高度医療機器として手術用ロボットである「ダ・ヴィンチ」と3台目のMRI診断装置を導入設置しました。ロボット手術は現在のところ前立腺癌に対して行っています。小さな傷からの内視鏡により、細部まで3次元画像として鮮明

に観察でき、ロボットアーム(ロボットの手)により細密な操作が行えます。これにより以前にも増して体に負担が少ない低侵襲かつ精緻な手術を提供できると存じます。

MRI検査は需要が多く、検査までの期間が長くなっていましたが、5月からはMRI診断装置が3台となりさらに多くのMRI検査が行えるようになります。脳卒中など緊急に治療が必要となる患者さんに対して迅速かつ適切な治療へと結びつけるようになり、地域の救急医療に貢献できると確信しています。

一方で医療従事者ことに医師の過重労働が社会問題となり、労働環境の改善が求められています。

当院では安全な医療が継続して提供できるように本年度は働き方改革を推進するという目標を掲げ業務の効率化に取り組んでいます。

患者さん、ご家族の皆様におかれましては、このような事情にご理解いただき、医療従事者の過重労働の軽減を実現できるようにご協力をお願いいたします。

さて、新年度になり当院も多くの新しい職員を迎えました。

新しい力を加えて職員一同医療者としての職業倫理を再認識し、地域から信頼され、安全で安心できる良質な医療が受けられる病院となるよう職員一丸となり努めてまいります。

どうぞよろしくお願いいたします。

マスクと手洗いの『標準予防策』とは



本年初頭からの新型コロナウイルスの流行で世界中が大混乱に陥っています。この流行に際して、「手洗いや手指消毒をおこなう」、「人込みの多い場所は避ける」、「屋内でお互いの距離が十分に確保できない状況で一定時間過ごす時は注意する」という対策(厚生労働省)がなぜ取られているのか、医学的な説明を受けるチャンスがないままに実行されている方も多いと思います。そこで今回はその点をわかりやすく解説致しましょう。



米国疾病対策センターが1996年に刊行したガイドには、『全ての患者の血液、体液、汗を除く分泌物、排泄物、傷のある皮膚、粘膜には感染性がある』という概念(標準予防策)が盛り込まれました。「これらには病原性のある微生物が潜んでいる可能性があると思って対応しなさい」ということです。ひょっとすると皆さんは、「汗臭いという言葉があるし、汗にも病原性があるんじゃないの?」と思われるかも知れませんが、実は人体から分泌された時点での汗は無菌的なのです。時間が経って皮膚表面で雑菌が繁殖して初めて「汗臭くなる」ので、汗にとっては実は「濡れ衣」なのです。



話を戻しましょう。もしも皆さんが新型コロナウイルスに感染していたとしたら、唾液はもちろん、くしゃみや咳、痰には全て感染性があることとなります。「くしゃみや咳をする人とは少なくとも1メートルの距離をおく」ことが感染防止につながると、世界保健機関(WHO)はホームページで述べ、『健康ならば、新型コロナウイルスにかかっている疑いのある人のケアをするのでなければ、マスクをする必要はない』一方で『咳やくしゃみが出る人はマスクしよう』と啓蒙しています。



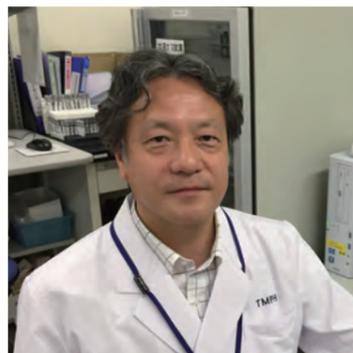
他人から飛んでくるウイルスから自己防衛するためにマスクを『積極的に装着する』方も多と思います。WHOはマスク装着の予防効果を頭ごなしには否定していませんが、『頻繁な手指衛生と組み合わせてこそ、マスクは有効』、そして『マスクをしたら正しい使い方と捨て方を知ろう』と啓蒙しています。『マスクで鼻と口を覆い、顔とマスクとの間に隙間を作らない、装着中はマスクの表面に触れない、マスクの使い回しはしない、マスクは後ろ側からはずし、蓋付きのゴミ箱に捨てる、手指衛生をする』のがWHOの推奨する、正しいマスクの装着方法です。



ではなぜ手指衛生を励行するべきなのか。答は単純明快で、『その手に付いたウイルスを、目、鼻、のどの粘膜に感染させないようにする』ためです。人が無意識のうちに何回顔に触れ、感染の危険性を増しているかについては、2015年のKwokらの研究(1時間に平均23回、うち44%は粘膜部に触れる)が有名ですが、さらに、2019年に早稲田大学のMoritaらが発表したユニークな研究があります。これは通勤電車のハリボテを作り、真の研究目的を教えていない学生40名にスマホを使わせながら、座席に座った状態と吊革につかまった状態とで各30分ずつ過ごさせて、何回顔に触れるかを測定した研究です。結果は1時間で平均17.8回、顔に触れ、うち42.2%は目、鼻、口の粘膜部でした。電車内での空き時間にポーッとスマホを見て時間をつぶす、『今の典型的日本人(?)』の実情に良く合った研究と小生は思います。せっかく『自己防衛のためにマスクを装着』しても、顔面やマスクに付着したウイルスをわざわざその指先に集め、目や鼻、口の粘膜部に塗り付ける必要はないでしょう。



ちなみにマスクを装着した場合としなかった場合とで、顔のどこに何回触れるかの比較研究は寡聞にして知りませんが……あっ、小生がこれから大々的に研究して、ノーベル賞を目指しましょうか?(笑)



臨床検査科 部長
林 達之

【専門領域】
血液内科、感染制御
【主な資格】
日本内科学会 認定内科医・総合内科専門医
日本血液学会 血液専門医・指導医
日本化学療法学会 抗菌化学療法認定医
ICD制度協議会 認定インフェクションコントロールドクター



5階東病棟の紹介



5階東病棟は、産婦人科が中心の病棟です。医師、助産師、薬剤師、栄養士、医療ソーシャルワーカー、看護補助者などが協力をして、患者さまの安全を守り、安心して過ごしていただけるよう日々努めております。今回は、その中の産科部門についてご紹介をします。



当院では、毎年300人以上の赤ちゃんが生まれています。アットホームな雰囲気の中で、安心して過ごしていただく為に、妊娠期からマタニティクラスの開催、アロマセラピー外来、産科外来などを有機的に連携させ、助産師がお母さま方に関わる機会を多く持つようにしています。

お産は、お家のリビングのような木目調のLDR(陣痛・分娩・回復室)で、アロマセラピーや静かな音楽と共に、心と身体の緊張がほぐれるような環境で、赤ちゃんを迎えます。退院後は、生後2週間の赤ちゃんの体重増加などを確認するための“すくすく外来”、産後1か月健診、赤ちゃん同窓会の“ひよこクラス”を開催するなど、妊娠中からお産・産後まで、継続してきめ細やかな関わりができるよう心掛けています。

お産を担当する助産師は、ベテランから中堅、若手まで幅広く、また乳房ケア、アロマセラピー、骨盤ケア、ベビーマッサージ、メンタルヘルスケア等々、得意分野や専門性を共有し

てより充実したケアを提供しています。医師スタッフは、1つのチームとなって、正常産から様々な異常産まで、豊富な経験とエビデンスに基づいて、適切な介入をさせていただいています。

今年度から、お母さま方のリクエストにお応えて「産後サポート・ケア入院」を開始しました。産後に入院期間を延長することができる制度です。通常、産後5日目で退院となりますが、“もう少し育児に慣れてから帰りたい”という方や、ご主人の出張などで赤ちゃんと二人で過ごすのは不安”という方などにご利用いただけるようになっております。

当院の産科についてはホームページに詳細を掲載しておりますので是非ご覧ください。



患者さんからのメッセージ

透析センターの更衣ロッカー室が狭く混雑しているので拡張をお願いしたい。

入院病棟には、体の大きい人用の車椅子がありますが、外来に貸し出し用がなくて不便です。



提案箱にお寄せ頂いたご意見への対応

ご不便をおかけしましたが、本年3月に個人用ロッカーを改良し多人数が利用できるようにしました。限られたスペースでもあることから、透析をご利用される患者様にとって利便性が図れるよう今後も継続して改良を加えて参ります。

ご不便をおかけしております。4月より正面玄関入り口に、大きいサイズの手椅子を新しく1台配置することになりました。増配を含めまして、15台の手椅子が使用できます。ご活用願います。

新規導入のMRI装置の特徴とその効果

放射線科 吉田 学 啓
診療放射線技師

MRI 検査の現状

当院では開院当初から2台の全身撮像対応可能なMRI装置にて画像診断を行っております。それぞれ磁場強度(磁石の強さ)が異なり1.5T(テスラ)と3.0Tがあります。

通常MRI検査は頭部領域の疾患を描出する目的で使用されることが多く、胸部や心臓など肺のような空気に囲まれている領域や動きのある領域は苦手とされてきました。特に3.0Tは頭部や脊椎などでの有用性が高く、同領域は他の病院でも検査されていますが、空気などの影響が強く胸部領域の診断には不向きでした。しかし最新の状態を保つことで、3.0Tで苦手分野であった胸部領域の検査も可能となっております。

この様に幅広い分野でMRI検査が可能になるとともに、その需要は増えてきました。それに伴い検査依頼数が増え、予約待ち日数が約1カ月延長してしまったことは、受診していただいている患者様へ十分な医療を提供できていない状況となってまいりました。その現状を打開するため考案されたのがMRI装置の増設です。

新規導入 MRI 装置の特徴

新規MRI装置は、最新画像による画像診断の提供、患者様のニーズに合った検査が可能で装置であるPhilips社製Ingenia Elition 3.0Tを導入いたしました。最新鋭の装置であるが故、その特徴は今までにないものが多数あります。

これまでMRI検査の時間は約30分~60分と長く、患者様に対する不安や負荷が大きい検査でした。しかし最新装置ならびに撮像技術により、検査部位や内容によりますが画質を落とすことなく最大50%の検査時間短縮が可能となっております。さらに高画質のMRI検査においても、検査時間の延長なく行うことが可能です(図1)。また患者様の負荷軽減のため、寝

台には患者の快適性を追及した寝台テーブル上のマットレスが採用されています。そのマットレスはクッション性に優れ長時間寝ていても不快感を与えないものとなっております。さらに患者様の体が入るMRI装置のドーム幅(ドーナツの穴のようなもの)が従来よりも広く圧迫感が改善され、それ以外にも検査中の音を減弱、検査時間の自動案内、MRI検査中に動画などの映像を見せるなど、リラックスした環境作りを可能としています(図2)。

画像診断の上でも現状のMRI装置より充実した検査内容、画質の向上は言うまでもありませんが、何よりも三台体制となることにより、MRI検査が必要な患者様に対する予約待ち日数の改善が一番のメリットと考えております。皆様に満足していただける医療を提供できるよう、放射線科一丸となって改良・改善して参ります。今後とも東京警察病院放射線科を何卒よろしくごお願い申し上げます。

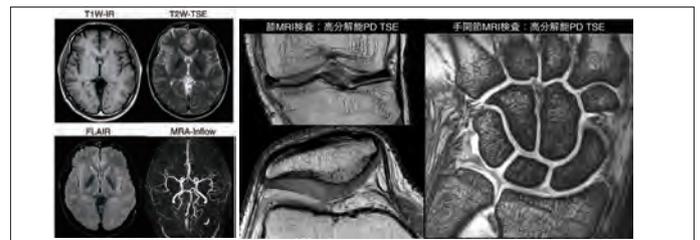


図1. 新規導入MRI装置の臨床画像。(左)頭部MRI検査は画質を落とさず従来よりも検査時間短縮が可能。(右)膝や手関節など関節の高分解能MRI検査も従来通り検査時間延長なく検査可能(画像提供:Philips Japan)。



図2. MRI装置内部から見た映像風景(右)と検査中の見え方(左)。閉所恐怖症などに対応した、広い空間と安心感をコンセプトとした設計(画像提供:Philips Japan)。

電話による処方せん発行について

当院では、新型コロナウイルス感染症流行期間に限り、4項目の条件すべてに該当する患者さんに対し、電話診療後に処方せんを発行し、かかりつけ薬局にFAXいたします。

なお、以下に該当する方は電話診療を行うことができません。

- インスリン注射や血糖測定チップなど医療材料が必要な方
- 医師が病状により受診が必要と判断した方

1. 受付方法について

- ① 受付時間: 8:15~15:00(日祭日除く)
- ② 受付電話番号: 03-5343-5611(代表)



*かかりつけ薬局の情報(名前、電話番号、FAX番号)をご用意の上お電話下さい。

2. 対象患者さんの条件

- ① 診療予約のある慢性疾患などで通院中の方
- ② 症状が安定し変わりがない方
- ③ 前回と同様の処方内容である方
- ④ 病院から薬局にFAXを送ることに同意している方

3. 処方日数

- 医師の判断により最長90日分まで

